

戦争体験者との交流会「初年兵行軍の体験」黒田千代吉氏

大正 13 年、大宮市（現在のさいたま市大宮区）に生まれた黒田さんは昭和 19 年 9 月、極二九〇四部隊の補充要員として入隊され、博多港から釜山を経て、中国に渡りました。空爆や栄養失調・風土病で多くの友を失う中、行軍を続けた体験をお話いただきました。

奥地へと進むにしたいがい、軍からの食糧補給はとだえ、飢えや栄養失調、マラリアなどの風土病との闘いの連続でした。雨の日は道が泥沼となり、足の自由を奪い、灼熱の日は草葉を食べ、水分を補給しました。昼間の行軍で空襲にあい、爆弾や機銃掃射の的となり、多くの犠牲者を出しました。その後、夜行軍に切りかえ、暗がりの中、前を歩く人にひたすらついていきました。歩きながら寝てしまい、田畑に倒れ込んでしまうこともしばしばでした。

南嶺山脈越えでは、崖っぷちの道を大砲の砲身、車輪、弾薬などをわけて運びました。途中馬が荷物ごと谷底に落ち、悲しい声でいなく馬を救い出すこともできず、結局、上官が銃で 撃ち殺し、行軍を進めました。

病人がでると、枝と天幕で即席の担架を作り 4 人が交代しながら運びました。担架を降ろした時、すでにその兵士が亡くなっていたことがありました。班長は帯剣でその兵士の手首を切り落とし、遺骨として持ち帰るものだと言われました。赤々と燃える炎のもとに、一人、また一人と集まり、燃える手首を断腸の思いで見つめていました。

黒田さんは「子どもや孫たちを戦場に送ってはならない。平和は鎮魂にあり。静かに心を鎮めて、平和の尊さをかみしめねばならない。そして、不戦の誓いを新たに、次の世代に伝えていかねばならない。」と今後も戦争の語り部として、講演活動を続けていきたいと結ばれました。

（この交流会の内容は、「資料館だより」から転載しました。）